

## 資 料

### 看護学生に対する訪問看護師の実習指導の現状と指導についての意識

松下 恭子<sup>1)</sup>, 多田 敏子<sup>1)</sup>, 岡久 玲子<sup>1)</sup>, 多田 美由貴<sup>1)</sup>, 藤井 智恵子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野, <sup>2)</sup>近大姫路大学看護学部看護学科

**要 旨** 本研究は、訪問看護師への質問紙調査から、看護学生に対する訪問看護師の実習指導の現状と実習指導についての意識を知ることが目的に実施した。対象は、A県で在宅看護実習を受け入れている訪問看護ステーションの訪問看護師198名であった。質問は、実習指導の現状（20項目）と実習指導の意識（10項目）に、「当てはまる（5点）」から「全く当てはまらない（1点）」の5段階で回答を求めた。その結果、実習指導の現状では「学生の利用者や家族への理解が深まるように情報を提供している」「学生が連携について理解が深まるように助言している」「学生に指導するときは言葉や伝え方に配慮している」の3項目が4.40と高かった。実習指導についての意識では、「指導することを通して自分の成長につながる」「指導することで学びなおす機会となる」の2項目が4.17と高かった。また、実習指導の際に心がけていることや信念への自由記載から、【対象全体を捉えやすくする】【思いや基本を伝える】【対象の尊重と支援の方法を伝える】【共に学ぶ存在として学生をとらえる】の4カテゴリが抽出された。以上のことから、訪問看護師は学生に対して、マニュアルに頼らず、利用者や連携についての情報提供や助言をしており、個々に合わせた指導をしている現状がわかった。また、訪問看護師は学生が緊張しないように、言葉や伝え方に配慮をして学生に関わっていることが明らかになった。訪問看護師経験の長い者の方が、実習指導を、自分自身の学び直す機会や自分の成長につながる経験であると捉えており、実習指導についての意義を見いだしていると思われた。また、雇用形態によって、実習要項の確認や記録への助言、反省会への参加などに差があり、訪問看護師間における情報伝達や指導方法についての工夫が必要である。

キーワード：訪問看護師，看護学生，実習指導

#### はじめに

少子高齢化や疾病構造の変化を受けて、在宅看護論が基礎看護教育に新しい看護の領域として位置づけられて15年が経過している。平成21年度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正では、在宅看護は統合分野に位置づけられ、在宅看護論実習では専門領域での学習が統合され、地域で生活する療養者への継続した看護を提供できる役割や、終末期における看取りに向けての教育内

容が求められている。

このような教育内容を展開するうえで、臨地実習は、学生が講義や自己学習では得ることのできない、個別の状況に応じた看護技術や態度を学び、自己の看護観を形成できる重要な場である。臨地実習で役割モデルとなる実習指導者は、看護実践の手本・見本となる、学生が主体的に実習できるよう支援する、理論（知識・技術）を実践と統合できるように指導する<sup>1)</sup>などの役割が認識されており、実習場面における指導者の役割は大きい。

そこで、本研究では、今後の実習指導に生かすために、学生指導に携わっている訪問看護師を対象に質問紙調査を実施し、実習指導の現状と訪問看護師の実習指導についての意識を知ることが目的とした。

2013年5月31日受付

2013年7月26日受理

別刷請求先：松下恭子，〒770-8509 徳島市蔵本町3丁目18-15  
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野

## 方 法

### 1. 対象者

研究の対象者は、A県で在宅看護論実習を受け入れている訪問看護ステーションの訪問看護師198名であった。

対象者選定は、A県で看護師養成をしている大学・専門学校・高校5年課程の、在宅看護論実習の受け入れ先となっている訪問看護ステーション34カ所に勤務している訪問看護師とした。質問紙送付の際には、介護サービス情報公開システムを用いて勤務している訪問看護師の人数を確認した。

### 2. 調査方法

調査期間は平成24年6月～8月であった。訪問看護ステーション34カ所に勤務する訪問看護師に対する自作の調査用紙を、施設管理者宛てに送付した。質問紙の内容は、実習指導への取り組みについて20項目、実習指導についての意識の10項目である。各項目について「当てはまる」から「全く当てはまらない」の5段階で回答を求めた。また、自由記載の項目を設けた。

### 3. 分析方法

調査項目の回答選択肢の「当てはまる」に5点、「やや当てはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり当てはまらない」2点、「全く当てはまらない」1点と点数化し、各項目の平均値及び標準偏差を算出した。訪問看護師経験年数の平均値が8.26年であったことから8年未満と8年以上に区分し、また、雇用形態と実習指導者講習会の受講希望の有無において点数の比較を行った。Mann-WhitneyのU検定を用いて有意差を確認した。有意水準は5%未満とし、分析にはSPSSver.19を使用した。

自由記載に関しては、実習担当教員間で検討を重ね、「実習指導の際に心がけていることや信念」については類似する内容をカテゴリ化し、ネーミングを行った。また「実習指導の際に言葉や伝え方で配慮している点」については、記述内容の表現を尊重し類似項目に分類した。

### 4. 倫理的配慮

徳島大学臨床研究倫理審査委員会の承認（受付番号1405）を得た後、調査対象施設の管理者宛てに訪問看護師個人に対して、本調査の趣旨とデータ管理や個人情報

の保護について記載した説明文を送付した。返信用封筒は、個人毎に直接返送できるように準備した。

## 結 果

34カ所の訪問看護ステーションに登録されている、198名の訪問看護師に調査用紙を送付し、60名から回答を得た（回収率30.3%）。

### 1. 対象者の概要

対象者の概要は表1に示す。職種は看護師54名（90.0%）、准看護師6名（10.0%）であり、年齢は30歳代10名（16.6%）、40歳代22名（36.7%）、50歳代22名（36.7%）、60歳代以上6名（10.0%）であった。

表1 対象の概要 N=60(%)

職種	看護師	54(90.0)
	准看護師	6(10.0)
年代	30歳代	10(16.6)
	40歳代	22(36.7)
	50歳代	22(36.7)
	60歳代以上	6(10.0)
看護師経験年数	10年未満	3( 5.0)
	10年以上20年未満	19(31.7)
	20年以上30年未満	21(35.0)
	30年以上	14(23.3)
	記載無	3( 5.0)
訪問看護師経験年数	1年以上4年未満	15(25.0)
	4年以上8年未満	15(25.0)
	8年以上12年未満	10(16.6)
	12年以上16年未満	13(21.7)
	16年以上18年未満	4( 6.7)
	27年	1( 1.7)
	記載無	2( 3.3)
雇用形態	常勤	45(75.0)
	非常勤	14(23.3)
	記載無	1( 1.7)
併せ持つ資格 (複数回答)	介護支援専門員	26
	精神保健福祉士	2
	保健師	1
	助産師	1
	養護教諭	1
	管理栄養士	1
	言語聴覚士	1
	救急救命士	1
	認知症ケア専門士	1
	がん性疼痛認定看護師	1
	実習指導者講習会	受講済
未受講		59(98.3)
	受講希望有	30
	受講希望無	29

雇用形態は常勤45名 (75.0%)、非常勤14名 (23.3%)であった。訪問看護師としての平均勤務年数は8.26年 (SD=5.49) で、8年未満30名 (50.0%)、8年以上28名 (46.7%)、無記入2名であった。介護支援専門員の資格を持つものは26名、精神保健福祉士2名、保健師、助産師、養護教諭、管理栄養士、言語聴覚士、救急救命士、認知症ケア専門士、がん性疼痛認定看護師が各1名であった (複数回答)。

また、実習指導者講習会受講経験のある者は1名 (1.6%) であり、未受講者59名のうち、今後受講を希望しているものは30名 (50.0%) であった。

## 2. 訪問看護ステーション実習指導者の指導の現状について

### 1) 実習指導の現状 (表2)

平均値が最も高い項目は、「学生の利用者や家族への理解が深まるように情報を提供している」「学生が連携

について理解が深まるように助言している」「学生に指導するときは言葉や伝え方に配慮している」の3項目の4.40であった。また低い項目は「実習指導マニュアルを活用している」の2.70であった。

訪問看護師の経験年数8年未満と、8年以上で比較すると「学生の実習目標や学びたいことを指導に生かしている」「学生指導について教員に相談したいと感ずることがある」の2つの項目で両群の間に有意差 ( $P<0.05$ ) がみられた。

訪問看護師の雇用形態での比較では「実習前に実習要項に目を通して」「学生の日々の記録に目を通して」「記録に助言している」「事前学習を指導に生かしている」「最終日の反省会にはできるだけ参加している」「学生の良い点について教員に伝えたことがある」の6項目に有意差 ( $P<0.01$ ) がみられた。

実習指導者講習会受講希望の有無の比較では、有意な差はみられなかった。

表2 訪問看護師のとらえた実習指導の現状と意識

	訪問看護師経験年数		雇用形態		講習会受講希望			
	8年未満 n=30	8年以上 n=28	常勤 n=45	非常勤 n=14	希望する n=30	希望しない n=29	有意確率	
	平均値	標準偏差	平均値	平均値	有意確率	平均値	平均値	有意確率
<b>実習指導の現状</b>								
1 施設内では実習指導の担当者を決めている	3.55	1.44	3.57	3.54		3.72	2.79	
2 施設内では実習指導に関して情報の交換をしている	4.21	0.96	4.37	4.04		4.14	4.29	
3 施設内では実習指導マニュアルを整備している	2.86	1.25	2.83	2.89		2.84	2.71	
4 実習指導マニュアルを活用している	2.70	1.30	2.63	2.78		2.68	2.57	
5 実習前に実習要項に目を通して	3.95	1.17	3.87	4.04		4.16	3.07	**
6 学生が利用者に援助できる看護技術の範囲を理解している	3.88	0.90	3.80	3.96		3.96	3.50	
7 学生の利用者や家族への理解が深まるように情報を提供している	4.40	0.65	4.30	4.50		4.38	4.21	
8 学生が連携について理解が深まるように助言している	4.40	0.56	4.33	4.46		4.42	4.14	
9 学生が在宅看護の制度に目を向けられるような問いかけをしている	4.12	0.65	4.03	4.21		4.20	3.86	
10 学生が倫理的側面に気づくことができるような問いかけをしている	3.97	0.73	3.90	4.04		4.04	3.64	
11 学生に指導するときは言葉や伝え方に配慮している	4.40	0.56	4.30	4.50		4.40	3.64	
12 学生の日々の記録に目を通して	3.93	1.15	3.93	3.93		4.22	2.93	**
13 学生の日々の記録に助言をしている	3.72	1.24	3.63	3.82		4.02	2.57	**
14 学生の事前学習を指導に生かしている	3.50	1.10	3.43	3.57		3.67	2.71	**
15 学生の実習目標や学びたいことを指導に生かしている	4.10	0.85	3.83	4.39	*	4.20	3.71	
16 施設での最終日の反省会にはできるだけ参加している	3.68	1.51	3.63	3.74		4.09	2.43	**
17 学生指導について教員に相談したいと感ずることがある	3.61	1.00	3.24	4.00	*	3.69	3.23	
18 学生指導の問題点を教員に相談したことがある	3.14	1.40	2.87	3.43		3.36	3.23	
19 学生の良い点について教員に伝えたことがある	3.59	1.36	3.43	3.75		4.02	2.00	**
20 教員は1クール2回以上は臨地に学生指導に来て欲しい	3.16	0.95	2.93	3.39		3.13	3.43	
<b>実習指導についての意識</b>								
1 学生を指導することは楽しい	3.24	0.92	3.13	3.41		3.33	3.08	
2 指導することを通して自分の成長につながる	4.17	0.80	3.93	4.41	*	4.16	4.21	
3 指導することで学びなおす機会となる	4.17	0.81	3.86	4.46	**	4.16	4.15	
4 学生が訪問することで利用者に良い影響があると思う	3.72	0.90	3.63	3.89		3.64	3.86	
5 看護教育についての関心が高くなった	3.47	0.87	3.37	3.64		3.53	3.43	
6 後輩を育てることにやりがいを感じる	3.52	0.83	3.30	3.75	*	3.49	3.57	
7 学生を指導することは苦痛である	2.88	0.93	2.87	2.89		2.89	3.00	
8 学生を指導することは緊張する	3.15	1.15	3.10	3.21		2.93	3.79	*
9 学生実習を受け入れると忙しい	4.10	0.93	3.93	4.25		4.07	4.14	
10 自分の指導方法が不安である	3.68	0.92	3.63	3.74		3.57	4.14	*

Mann-Whitney の U 検定 \*  $P<0.05$  \*\*  $P<0.01$

## 2) 実習指導についての意識 (表2)

平均値が最も高い項目は、「指導することを通して自分の成長につながる」「指導することで学びなおす機会となる」の2項目の4.17であった。また低い項目は「学生を指導することは苦痛である」の2.88であった。

訪問看護師の経験年数8年未満と、8年以上で比較した結果、「指導することによって自分の成長につながる」(P<0.05)、「後輩を育てることにやりがいを感じる」(P<0.05)および「指導することで学びなおす機会となる」(P<0.01)の3つの項目において両群間に有意差がみられた。

雇用形態による比較では、「学生を指導することは緊張する」「自分の指導方法が不安である」の2項目において両群間に有意差 (P<0.05) がみられた。雇用形態別に訪問看護師経験年数をみると、常勤の訪問看護師経

験年数は8.02年、非常勤では8.54年であった。

実習指導者講習会受講希望の有無の比較では、「学生に指導をすることは楽しい」「後輩を育てることにやりがいを感じる」の2項目において両群間に有意差 (P<0.05) がみられた。

3. 実習指導において心がけていることや配慮について  
1) 心がけていることや信念 (表3)

実習指導の際に心がけていることや信念について、自由記載で記述を求め35名から回答を得た。意味内容によって42文節に分けることができた。【対象全体を捉えやすくする】【思いや基本を伝える】【対象の尊重と支援の方法を伝える】【共に学ぶ存在として学生をとらえる】の4カテゴリが抽出された。

表3 実習指導の際に心がけていることや信念

N=35

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
対象全体を捉えやすくする	雰囲気作り	程良い緊張感をもちつつ、思いが表出できるような雰囲気を作る 緊張しないような声掛けをする 仕事は楽しく、少しの関わりの人にも楽しい出会いだった、面白い人だったと思い出してもらえるようにしている 優しい気持ちで向き合う 質問はうやむやにせず必ず答える コミュニケーションを大切に
	興味や理解を深める	在宅看護に興味を持てるように指導 在宅看護の楽しさを伝えている 看護師を選んで良かったと思ってもらえるように指導 家族の理解や他職種との連携の重要性を伝える
	全体の捉え方	全人的なアプローチの大切さを指導 人との関わり、患者・家族の生きる力をわかってもらう 生活背景やサービスが必要な理由を考えてもらう その人らしさを大切に、患者を理解してもらえよう指導 在宅生活を感じて、訪問しない時のことも想像してもらいたい
思いや基本を伝える	訪問看護への思い	在宅が好きなので学生に知ってもらいたい 訪問看護を好きになってもらいたい 訪問看護を尊い仕事であると考えている 利用者とのかわりを楽しむ
	看護師としての心構え	初心忘れるべからず 基本は思いやりである 訪問看護師として健康を保つための考え方 心身共に安定して日常を過ごす
対象の尊重と支援の方法を伝える	在宅看護の特徴	訪問看護は契約で成り立つ 在宅看護の素晴らしさや特徴を必ず伝える 病院と違う機器や物品に頼らない看護であること 細かいことではなく在宅療養を大きく理解してもらえよう
	対象者を尊重	家族の介護に間違いがあっても一度は受け入れ、考えを尊重する 利用者を尊重する 利用者の心に寄り添う 学ばせてもらう姿勢を持ち尊厳を傷つけない 精神科疾患に偏見を持たないように留意する
	対象者への支援方法	健康管理をすることで自己治癒力がアップすることを知らせてもらう 利用者さんのストレスを伸ばす 家族や本人が人生を楽しみたいと感じられるよう支援する
共に学ぶ存在として学生をとらえる	学生への思い	心に残ることが1つでもあり、今後の人生に役立ってほしい 学生の成長を見守り共に成長していきたい 次世代を担う人材である 講義で習ったことが現場でどのようにつながっているかを学んでもらう 基本を押さえ、自ら学ぼうとする態度で学習して欲しい
	指導に対する姿勢	自分の看護を見直す機会と思う 看護とは『生きた身体と、生きた心と身体とが一体となって表現された感情とに働きかけるのである』

## 2) 指導の際に配慮している点 (表4)

実習指導の際に言葉や伝え方で配慮している点を、自由記載で記述を求め45名から回答を得た。

記載内容が2項目に及ぶものは文節に分け、記述内容は47文節となった。〈言葉使いやコミュニケーション〉〈伝え方や指導方法〉〈指導内容〉〈その他〉の4項目に分類された。

## 考 察

## 1. 実習の受け入れ体制の現状

訪問看護ステーション事業所1件当たりの常勤換算訪問看護師員数は4.6人<sup>2)</sup>であり、比較的小規模な事業所が多い。そのため実習指導者は、日常の訪問業務に加えて学生実習指導を兼務しているのが現状である。マニュアル整備と活用に関する項目の値が低かったことから、実

表4 実習指導の際に言葉や伝え方で配慮している点

N=45

分 類	記述内容
言葉使いやコミュニケーション(23)	<p>分かりやすく伝える(9)</p> <p>ストレートに言う</p> <p>医療用語の理解度、敬語、利用者への話し方、接し方</p> <p>丁寧に問いかける様に指導すること</p> <p>相手の方に不快を感じさせないように</p> <p>学生が緊張し過ぎないように</p> <p>コミュニケーションの大切さ</p> <p>ていねいに話す</p> <p>一方的にならないよう、学生が発言しやすいような言葉かけ</p> <p>訪問看護に興味を持ってもらえるよう話す</p> <p>専門職に就こうとしているため専門用語を用いている</p> <p>きつい言葉にならないように</p> <p>先入観を与えない様な表現を心がけている</p> <p>明るく質問しやすい空気を作れたらと思っている</p> <p>訪問看護の魅力ややりがい、自己研鑽の必要性が伝わるように、人間愛に目覚めて欲しいという願いを込めて接するよう心がけている</p>
伝え方や指導方法(15)	<p>ケア前は必ず今から何をするか伝えてから行うように指導している</p> <p>自分の言葉で感じたことを表現できるよう聴く姿勢を保ちながら伝えること、一方的にならないよう注意することは避けて、できるだけ自分の取った行動を自分の言葉で発言してもらうように問いかける</p> <p>学生自身の考えを引き出す</p> <p>具体的な例を挙げながら話す方が分かりやすいのではと思うので、心がけている</p> <p>学生が気づけている点を見つけてほめる(認める)、学生の目標や計画を活かしてアドバイスする</p> <p>はじめはこちらから質問してどの程度理解しているか知る</p> <p>理由を付けて説明する</p> <p>できるだけ自分で考えるような質問の仕方をする</p> <p>質問形にしている</p> <p>こちら話を聞いてメモさせるだけでなく、なるべく学生が話せる雰囲気にもっていつている</p> <p>具体的、自分で考えられる様に</p> <p>守ってもらう内容は厳しく、利用者家人との関わり手技等は分かりやすくリラックスして利用者にも聞く</p> <p>押しつけでないようお互いに考えながら進めることなど</p> <p>理念と現場活動について、考察できる様に配慮している</p>
指導内容(5)	<p>利用者を尊重してケアすること</p> <p>利用者に対する態度</p> <p>理解しやすいように制度等の説明</p> <p>利用者様の目線で物事を考えられるように</p> <p>利用者によって家の中の状況も違うことを伝えている</p>
その他(3)	<p>あまり気にしていない、学生が友達の様にして話してくるのは少し戸惑う</p> <p>私の思いどおりに伝わっているか分からない</p> <p>普通になっている</p>

習指導体制が組織的に整備されていないことも考えられる。しかし、そのような中でも、訪問看護師は施設内で情報交換を行い、家族と利用者・連携についての情報提供や助言をしており、学生に合わせた指導を実施していると思われた。

教員への相談に関する項目について、訪問看護経験年数8年以上が高い値であったことは、実習施設で学生の受け入れ期間が長いことで、教員との関係性が深まっていることの表れであると考えられる。経験年数の長い看護師は、より良い学生指導をめざして教員に相談をしているとも考えられる。

訪問看護師の雇用形態による差は、実習要項の確認や記録への助言、事前学習を通じた指導や反省会への参加、学生の良い点を教員に伝えたことがあるという項目にみられていた。このことから、実習期間を通して学生の成長を感じることが難しいという、非常勤看護師の現状が浮かんでくる。

訪問看護師のワーク・ライフ・バランスについての研究報告では、訪問看護師に占める常勤者は64.9%<sup>3)</sup>、また大阪府における平成24年の調査では、常勤6対非常勤4という報告<sup>4)</sup>がされており、本研究の結果では非常勤者の割合が25%であったが、全国的には4割近いと考えられる。勤務時間や日数が多様な訪問看護師間の、実習指導上の意見交換や引き継ぎがスムーズに実施できるような情報伝達や、実習指導方法についての工夫が必要であると思われる。

## 2. 訪問看護師の実習指導についての意識

訪問看護師は指導の際に、学生に分かりやすく伝え、明るく質問しやすい雰囲気を作り、環境づくりへの配慮を心懸け、学生の自発性を伸ばすような意図的な関わり方をしていた。

全国訪問看護事業協会の報告では、訪問看護師の訪問の直接業務時間は平均約63.7分である<sup>5)</sup>。限られた時間の中で発問を行い、学生の思考の形成を待つことは現状では難しいと思われる。しかし、それにもかかわらず、学生の考えを引き出そうという姿勢には、学生は次世代を担う人材であると感じ、自身の看護への取り組みや学生指導を振り返り、共に学ぶ存在として学生を捉えようとする思いが込められていると考えられた。

訪問看護師経験8年以上の看護師が、実習指導を学び直す機会や自分の成長につながる経験であると捉えており、実習指導の経験を積み重ねていく中で、学生とのか

わりを通して、後輩を育てることへの意義を見いだしていると思われた。

訪問看護師としての経験年数に関わらず、学生を受け入れることは忙しく不安と感じているが、苦痛の点数は高くない。また、非常勤の訪問看護師は、緊張や指導方法への不安を感じている一方で、学びなおす機会である、成長につながる、やりがいを感じる、という点で常勤訪問看護師との差は無く、実習指導が自分自身の学びや成長につながっていると感じている。このような、指導者のやりがいにつながる点を、教員は支持強化していくことが求められているのではないだろうか。

## 3. 在宅看護論実習における課題

高井らの研究では、学生は日常生活技能を意図的に模倣する機会が少なくなっている<sup>6)</sup>ことが示され、栗本は講義前の学生への調査から在宅看護に対するイメージの描き難さ<sup>7)</sup>を報告していることから、学生のレディネスや個性に応じたより細かい指導が、今後ますます必要になってくると思われる。

在宅看護論実習は、訪問看護師が看護業務を兼ねながら学生指導を行っているのが現状である。また、訪問看護師は単独で療養者宅を訪問することがほとんどであり、訪問看護師のロールモデル行動を観察する機会は少ない可能性がある<sup>8)</sup>といわれている。このことから、学生への実習指導に関しても、ロールモデルとなる先輩訪問看護師の指導の場面に立ち会う機会が少ないことが考えられる。

そのことを補うためには、訪問看護師と教員間で、指導方法についてより具体的に意見交換を行うことが重要になってくると思われる。そのことを通して、学生個々の実習目標に沿った指導方針や、指導者の役割を精選していく必要がある。

また、学生は実習中に同じ療養者への複数訪問が難しく、少ない訪問の機会を通してそれぞれの生活環境や背景と価値観や療養への思いや家族関係など、多面的な視点で療養者の全体像を捉えることが求められる。実習指導者の役割は、学生が療養者の全体像を捉える視点について適切に助言し、学習のきっかけを作るという、大きなものである。そのため、教育課程全体の中での在宅看護論実習の位置づけや、個々の学生のレディネスを把握した実習指導を行うためには、実習指導者講習会の受講者が増えていくことが望ましいと思われる。

### おわりに

在宅看護論実習を、統合分野に位置づけられた実習として、講義内容と実習経験を関連させ、より深く在宅看護について考える場とするために、実習指導の現状と指導への意識をもとに実習体制を検討していきたい。

### 謝 辞

お忙しいなか、調査にご協力を頂いた訪問看護師の皆様へに深謝いたします。

### 文 献

- 1) 渡部菜穂子, 一戸とも子: 看護学実習における臨地実習指導者の「看護実践の役割モデル」の認識, 弘前学院大学看護紀要, 6, 1-10, 2011.
- 2) 厚生労働省大臣官房統計情報部: 平成23年介護サービス施設・事業所調査の概況, 13, 2012.
- 3) 山口陽子, 百瀬由美子: 訪問看護師のワーク・ライフ・バランスの特徴と個人特性との関係, 愛知県立大学看護学部紀要, 17, 15-24, 2011.
- 4) 大阪府における訪問看護の実態調査について, 大阪府看護協会 [http://www.osaka-kangokyokai.or.jp/CMS/data/img/2013\\_homonkango\\_jittaicyosa.pdf](http://www.osaka-kangokyokai.or.jp/CMS/data/img/2013_homonkango_jittaicyosa.pdf). (アクセス日2013.7.2)
- 5) 全国訪問看護事業協会 (平成22年度厚生労働省老人保健健康増進等事業): 24時間訪問看護サービス提供の在り方に関する調査研究事業報告書, 84, 2011.
- 6) 高井奈津子, 茶碗谷草子, 前垣綾子 他: 看護学生の日常生活体験の実態調査, 北海道文教大学研究紀要, 34, 103-111, 2010.
- 7) 栗本一美: 看護学生の在宅看護に対する認識—在宅看護の講義前調査より—, 新見公立短期大学紀要, 29 (2), 83-90, 2009.
- 8) 横山京子, 舟島なをみ: 訪問看護師のロールモデル行動に関する研究, 看護教育学研究, 19(1), 11-20, 2010.

## *Visiting Nurses' Awareness of the Current State of Clinical Practicum and Guidance*

*Yasuko Matsushita<sup>1)</sup>, Toshiko Tada<sup>1)</sup>, Reiko Okahisa<sup>1)</sup>, Miyuki Tada<sup>1)</sup>, and Chieko Fujii<sup>2)</sup>*

<sup>1)</sup>*Department of Community Nursing, Major in Nursing, Institute of Health Biosciences, Tokushima, Japan*

<sup>2)</sup>*University of KinDAI Himeji School of Nursing Department of Nursing, Hyogo, Japan*

**Abstract** This research aimed to study clinical practicum provided by visiting nurses to nursing students and awareness of the practicum. The participants were 198 visiting nurses at visiting nurses' stations in Prefecture A. They responded to questions on the actual state of clinical practicum (20 items) and on their awareness of practicum (10 items) by choosing one of the items of a 5-point Likert scale, where 5 was "Applicable" and 1 "Not Applicable at All". Regarding the actual state of practicum, three items received a high score of 4.40: "Providing information to enhance the students' understanding of service-users and users' families"; "Helping the students improve their understanding of cooperation"; and "Being considerate of the ways of communication when giving guidance". Regarding their awareness of practicum, two items received a high score of 4.17: "Giving guidance leads to my own growth" and "Giving guidance is an opportunity to relearn". Further, four categories were extracted from their free descriptions: Easier to grasp the entirety of care targets; Communicating thoughts and basics; Teaching the way to respect and support care targets; and Seeing the students as co-learners. The findings indicate that the visiting nurses tailored their guidance according to the students' individuality, and did not rely on manuals in providing the students with advice and information about clients and cooperation. Furthermore, they were considerate of their words and ways of communication to avoid putting the students under pressure. In addition to grasping the the real significance of a practicum, those experienced visiting nurses tended to consider practicum as an opportunity to relearn, and improve themselves. There were differences between visiting nurses with regard to their employment statuses, their advice on checking and reporting of practicum requirements, and to their participation in evaluation meetings. Finally, the results of the present study underscore the need to improve the capacity of visiting nurses to communicate information and give guidance.

*Key words* : visiting nurses, nursing students, clinical practicum guidance